


 巻頭言

「脱皮」は「不易流行」 でなくてはならない



一般社団法人 九州病害虫防除推進協議会 代表理事

つつみ

たか

ふみ

「脱皮しないヘビは減びる」とはよく知られたニーチェの言であるが、代表理事として本会の運営にあたるに際し最も肝に銘じている言葉でもある。本会が設立された目的である「現場ニーズに沿った病害虫防除技術の迅速な開発のため農業関係企業および団体と農業関係試験研究機関等の連携を円滑に進めるためのパイプ役」を果たすべく機能し続けるには、両者のニーズを満たす成果が得られるようなマッチングプランが必要であり、それを実施できる組織でなければならない。これらのニーズは時代とともに変化するものなので、それを敏感に感じ取ってマッチングする側も変化しなければならない。そのためには「今のまま続けることでよいのか?」という意識を常に持ち、時期が来たら躊躇なく「脱皮」する覚悟が肝要である。50年余りの歴史を省みて、九防協というヘビが生き残る道はこれしかないと思っている。

もう一つ、司馬遼太郎は、「坂の上の雲」の中で秋山真之に「最強の軍艦も長いこと海に浮かんでいると船底に牡蠣殻が付き戦場で本来の性能が発揮できなくなる。組織も長いこと続けているとだんだん牡蠣殻が付いてくる」といった意味の言葉を吐かせている。いずれの牡蠣殻も時間の経過とともに本来の機能に影響を与えることは間違いないので気をつけて削り落とす必要がある。しかし、船底の牡蠣殻同様、組織の牡蠣殻も内部からは見えづらい。そのため、牡蠣殻の付着状況は常に外側からの観察が重要である。「岡目八目」とはよく言ったもので、外部からは案外よく見ることができる。本会の場合、会員である企業、団体および主要な事業である農薬連絡試験を委託している試験研究機関の意見、要望に常に耳を傾けることが牡蠣殻対策として重要であり、公式な場である評議会や運営委員会はもちろん、あらゆる機会に意見、要望を遠慮なく言っていただける雰囲気づくりに努めているつもりである。特に「耳が痛い話」はなかなか聞こえてこず文字どおり「有り難い」ので、積極的に耳に入れていただけると幸いである。

以上、組織は時代とともに常に変わり続けていかなければならない。過去にこだわった運営を行うと組織がうまく機能しなくなる、という持論を展開してきた。しかしそれは過去をすべて否定することでは決してなく、変

化の本質は「不易流行」でなくてはならないと考えている。例えば、本会の主要な事業である農薬連絡試験では試験設計や成績検討はすべての関係者の参集を求め対面で実施することを原則としている。世間ではコロナ下であって会議のリモート化が進む中、時代錯誤的対応との声も聞かれるが、これには強いこだわりを持っており今後も堅持するつもりである（もちろん、適切なコロナ対策は実施している）。

農薬連絡試験は会員企業から要望された薬剤試験を各地の試験機関に依頼し、それぞれの地域、作型等にマッチした効果的かつ効率的な使用法確立にむけた試験を実施してもらっているが、同時期に発生する他の病害虫や、使用時期に想定される気象条件等を考慮した設計で薬剤の効果を評価し、特性を活かした活用場面の解明を強く意識している。であるから設計は画一的なものではなく剤の特性が正しく活かせるよう工夫したものとなる。結果の評価においても然りである。そのため、設計会議や成績検討の場では多くの専門家による忌憚のない議論による原案のブラッシュアップを強く求めている。ろくに議論しないなら会議なんか止めたほうがよい。時には提出された設計や成績が炎上することもあるが、それはそれで自己の経験値が上がったと前向きに考えてもらいたい。研究を志向する者ならば。

もう一つの大きなメリットは、対面会議では休憩時間や懇談会で参加者相互の交流ができることである。これはリモート会議では困難であろう。近年は人事異動のサイクルが短くなり経験の浅い試験担当者が増えているが、多くの学会がリモート開催になっているため、彼らが他県や国研の同じ分野のベテラン研究者と直接会って話をする機会は非常に少なくなっている。対面会議のこの時間が彼らのキャリアアップの一助になればと考えている。また、会員企業にとっても多くの試験機関の研究者と一度に会うことができる少ない機会である。今後の試験計画などについて情報収集するには最適であると考えている。本会はこれらの機能を重視しているため、対面会議は九防協が「病害虫防除技術の迅速な開発のため民間企業と研究機関の連携を円滑に進めるパイプ役」を果たすうえで欠くことができないものだと考えている。